

月刊  
JMITU

# アノコノカ



.....  
のどが乾いてたまりませんでした  
水にはあぶらのようなものが  
一面に浮いていました  
どうしても水が欲しくて  
どうとうあぶらの浮いたまを飲みました

「刻まれた手記」

8月号

日本金属製造情報通信労働組合大田地域支部  
セガ グループ分会 2023年発行

No.464

## 23年秋闘要求準備 アンケート回答お願いします。

私達JMITUセガ労働組合は、組合ホームページにて秋闘・年末一時金についてのアンケートを行っています。

(3分ぐらいで終わる簡単なアンケートです。回答お願いします。)

皆さんからのアンケート回答を参考に、要求の立案、会社との交渉に臨んでいきたいと思えます。

ガソリンの高騰、物価高に追いつけない賃上げと私たちの暮らしは日々苦しくなってきました。

今や労働者の4割が非正規と言われています。数年前に「働き方改革」などと騒がれていましたが非正規の待遇、

働きやすさは変わったでしょうか？今もなお多くの職場では非正規で働き重要な役割を担っています。それなのに低賃金不安定、ボーナスなしと正社員との格差は何ら変わっていません。格差是正はどこへ行ってしまったのでしょうか。

なかには、数十年勤務している人たちもいます。会社も業務で必要だから雇っているのだから、本人が望むのであれば正社員にすべきです。

また正社員では導入して20年近く経ちますが未だに人事制度の公平な評価と明確な昇格基準での問題があらわらちらで聞かれなくなっています。

2022年度の国の決算では、一般会計で約71兆円の税収を記録し、3年連続の過去最高を更新しました。

それでは物足りないのか、政府税制調査会が6月にまとめた中期答申では、「日本の会社員の税金は安すぎる」ということから、給与所得控除のさらなる引き下げ、今まで長く勤務していれば退職所得にかかると税金が優遇されていたが、勤続年数20年超の期間が増えれば長いほど、税負担が増える。20年以上1つの会社に勤め続けている人にとつては増税、通勤手当が非課税所得であることが「妥当であるか」と指摘しているの

通勤手当も年収として計算され、会社が遠くて通勤費をたくさんもらった場合も、その額に依じて課税されてしまいます。このサラリーマン増税が行われるかは決まっています。ネットでは話題になると岸田政権ではサラリーマンのみを狙い撃ちした増税はないと話が打ち消されました。

税金を取るより先に税金の使い方を変えるべきです。「異次元の少子化対策」を取ってみても政府の考えはずれています。

## サラリーマン増税

2022年度の国の決算では、一般会計で約71兆円の税収を記録し、3年連続の過去最高を更新しました。

それでは物足りないのか、政府税制調査会が6月にまとめた中期答申では、「日本の会社員の税金は安すぎる」ということから、給与所得控除のさらなる引き下げ、今まで長く勤務していれば退職所得にかかると税金が優遇されていたが、勤続年数20年超の期間が増えれば長いほど、税負担が増える。20年以上1つの会社に勤め続けている人にとつては増税、通勤手当が非課税所得であることが「妥当であるか」と指摘しているの

通勤手当も年収として計算され、会社が遠くて通勤費をたくさんもらった場合も、その額に依じて課税されてしまいます。このサラリーマン増税が行われるかは決まっています。ネットでは話題になると岸田政権ではサラリーマンのみを狙い撃ちした増税はないと話が打ち消されました。

税金を取るより先に税金の使い方を変えるべきです。「異次元の少子化対策」を取ってみても政府の考えはずれています。

軍事費についてもあまりに莫大な税金を使いすぎです。消費税を増税しても社会保障は悪くなる。これだけ日本が悪くなった原因のすべては政治が問題です。

私達が今できることは、まずは選挙に行くこと、そして政治を監視しなくてはなりません。悪政を止めなくてはなりません。

私達が今できることは、まずは選挙に行くこと、そして政治を監視しなくてはなりません。悪政を止めなくてはなりません。

仙洞田一彦

水曜日、朝からだるい。咳も出る。今日は変わりやすい天気だと、テレビの天気予報の聲が耳に入る。

毎日三十五度前後の日が続くと、「晴れ」の予報より「変わりやすい」天気の方が、ちよつと救われる。曇り時々雨か、雨時々曇りで一休みしたい気分だ。肩も凝っている。昨日、一昨日、その前と、肩が凝るようなことをしたか思い出しても、思い当たるものがない。普段と違うことをしたのは一昨日、月曜日の夕方だけだ。しかし、肩が凝るほどのことではない。

ゴホツ

咳が出て思い出した。そういえば、今の自分の咳と同じ咳をしていた人が、一昨日のあの場にいたな、と。夏なのにインフルエンザが流行っているようなことを言っていたから、インフルエンザかと疑った。

一昨日の夕方は『天地』という会員向けの機関紙づくりだ。友人からコロナで人手が足りない、手伝いに来ないかと電話があった。作業後の一杯に釣られて行った。一緒にいたのは四人、作業時間はせいぜい二、三時間だった。

いや、世界各地で山火事が発生しているような燃える夏で、夏バテが早く出て来たのではないか。そうとも疑った。理由は、この一週間ほとんど昼寝をしなかったからだ。夜

は熱帯夜で、眠れることは眠るが、眠りが浅い。後期高齢者となると、これを補うのは昼寝だ。その昼寝ができなかったというか、眠らせないほど面白い本を読んでいた。眠りが来たら眠ろうと思つて、ゴロンと横になつて読み始めるが、眠れないのだ。面白い。

一日一冊、全六巻読んでしまった。それがたつたつて、バテたのかとも思つた。

だから、今日一日、昼寝の時間も長めにとつて、夜も早めに眠れば回復するだろう。晩酌のビールも、夕飯の弁当も、いつもと同じはずなのにまずかった。一晩眠れば変わるかもしれない。明日の朝結論を出そう、と思つた。

木曜日。ダルイ。集中力ない。咳も出る。ダメだった。シ

ヤワーを浴びて、ねばりついている汗を流し、病院へ向かった。昨日より天気がいい。雨傘を日傘代わりにさして病院へ行った。

病院の玄関口にある、顔を映して体温を測る機械の前に立った。

「三十七度です、問題ありません」

機械が答えた。いつもと同様、三十分歩いて来た。いつもは三十六度ちよつとだ。やっぱり熱がある。受付前に立つて、言つた。

「熱があるので、見てもらいたいのですが」

受付の青年は、前にある電話でどこかに掛けて、受話器を置いた。すぐに立ち上がるのと、カウンターから出てきて私は外に誘導された。玄関口

の看板を手で指して言った。

「発熱外来は、事前に電話で予約してから来てください。いまいっぱいのです。夕方か、もしかすると明日になるかもしれません」

えっ、まだ、朝の九時半だ。

コロナが流行り始めたころだったか、電話予約を掌編集小説に書いたような記憶がよみがえった。

おとなしく帰るしかない。

私がおとなしくと、青年は病院の中に戻って行った。

「最近、うるさくなつたねえ」

後ろで声がしたので振り返ると、一緒に聞いていたのか、どこかのオヤジがつぶやくでもなく、話しかけるでもなく言った。

断られると、急に不安になった。それでも炎天下を日傘

代わりの雨傘をさして帰った。

帰ってすぐに病院に電話した。すると、午後も、診察時間は遅くなるようだった。どんな症状かというから、咳が出るとか、ダルイとかそのまま言った。

「体温は」と聞かれたから、「病院の入り口にある機械で三十七度と出ました」と答え

た。「あれは、あまり正確ではないので」と言われた。

「いや、その」

私は答えに詰まった。

「体温計はないんですか」

「どこかにあったはずですが」  
体温計なんかここ二十年以上使ったことないんじゃないか。電話を片手に、机の引き出しをあけたが見当たらない。コロナが流行ってきて、顔を

映す機械があちこちに置かれるようになったので、それで間に合わせていた。

「でも、ダルイから、熱はあるんです」

「そちらから病院まで、どのくらいかかりますか」

質問内容が急に変わった。

諦めたのかもしれない。

「三十分です」

「はい分かりました」

電話は終わった。

午後三時半ころ電話があった。支度をして出た。病院の今まで使ったことのないドアを指示された。インターホンを押してください。案内しますということだった。

指示されたとおりに、インターホンを押し、名前を言った。看護師が来てドアを開けた。ドアに鍵が掛かっていたわけ

ではない。病院内をうろうろ

されたら困るからだ。入ったらずぐ目の前に、仕切られた空間があった。その中で待つように言われた。一人、ある

いはこども連れ一組くらいしか入れない。これなら確かに

電話で一人、一組ずつ呼び出すしかない。いつもいる待合室の片隅で、外から見えにくく、普通なら掃除道具なんか置いてありそうな一角だ。

見るからにベテランの看護師が来た。電話の看護師は、

声からすると若かった。

「身長、体重は」

「ええと、縮んじやつたからなあ……体重はちよつと痩せたしなあ……」

「要するに測ってないんですね」  
目の前の人は年齢が近いだ

けに、すぐに飲み込んでくれた。体温計を持ってきて、測ってくださいと言われた。いろいろな質問に答えているうちに時間になったのか体温計をとまれて、脇から外して渡した。

「三十七度です」

なあんだ、朝来て玄関の機械で測ったと同じだと思ったが声には出さなかった。

いなくなり次に来たときは、綿棒のようなものを持ってきて、鼻の穴に突っ込まれた。よくテレビで見かけた場面だが、私は初めてだった。痛いというのではないが、思わずのけぞってしまう。

また看護師が消えた。次はいよいよ判決か。高齢者がベツド上で、色々な機械に囲まれて横たわっている場面が思

い浮かぶ。このまま入院ということはないだろうな。もしこれがコロナなら、意外に軽いのではないか。電話の看護師からは、ワクチンは最後いつ射ったのですか、と問われ

「今年の春かなあ、いやもつと前か」などと答えたら病院に来るまでに調べておいてくださいと言われてしまった。

ポケ爺に聞いても、どうせ覚えてないだろうと思ったのか、ベテラン看護師は私に聞きもしなかった。一応調べたら、去年の八月八日が最後のようだ。もうそんなに時間が経ったのかなあとという思いだった。これはコロナでなくインフルエンザじゃないのか。他に考えるばかりだ。

仕切り板が半透明で外が透

かしてみえるから閉塞感はありません感じられないが、まさかこのまま忘れ去られてしまわないだろうな、と不安に駆られる頃、白衣の上に防護服、防護眼鏡をした男が顔だけ出して言った。

「コロナでした。このまま収まれば、もう来なくてもいいです。もしまた何かあったら電話してください。後は看護師が説明します」

口ぶりから医師だったようだ。またベテラン看護師が来た。一通り説明した後、「二十三日から具合が悪くなりましたから二十八日まで家で静かにしてください。ご家族は」

「一人暮らしです」  
「それなら買い物に行かなければなりませんね。買うもの

をあらかじめ決めて、できるだけ短い時間で切り上げるようにしてください」

それから、診察代を支払い、薬をもらって帰ってきた。いずれも自分が動き回らず、決められた場所に待っているだけですんだ。

帰宅後すぐに月曜日の夕、一緒に仕事した友に電話した。集中力がないという。熱があるのだ。病院行きを進めた。

本人もそのつもり。翌日昼間、コロナ陽性というメールが入った。月曜の夕一緒にいた他の人たちは？ こういうのをクラスターって言うんだっけ。忘れちゃったなあ。二十八日まで自粛。コロナ後遺症というのもあるから、油断できないよ。あれから三年八ヶ月、とうとう捕まっちゃった。

とうとう捕まっちゃった。